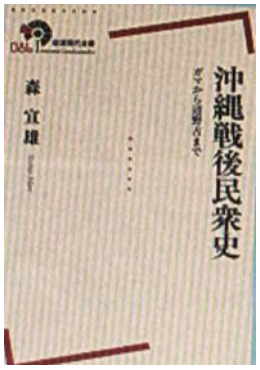
沖縄戦後民衆史

表題は森宣雄著「岩波現代全書」新刊である。「ガマから辺野古まで」という副題のように、沖縄の戦後民衆史が克明に綴られ、沖縄の今を考えるうえでも示唆に富む。序章「ひとびとが終わらせる戦争と戦後」の最後から。



沖縄戦後史とは、沖縄戦のつづきとしての〈捨て石・占領〉体制が継続する時代であり、それを終わらせようとするひとびとがつくり、あゆんできた歴史の総体である。いまを生きる私たちの歴史意識においては、そうとらえるのが妥当だろう。それは 1972 年の沖縄の日本復帰という統治体制史の転換をまたぎ越す、ひとびと＝民衆の歴史である。

沖縄戦から現在にいたるこの歴史において、沖縄に生きるひとびとは独自な社会と思想を築いてきた。アメリカを代表する東アジア研究者のひとり、チャルマーズ・ジョンソンは、多くの国でベストセラーとなった著書のなかで、沖縄は「住民が自力で勝ち取った民主主義をみずから享受している日本で唯一の地域社会である」と述べた。その自力でかちとられた沖縄独自の民主主義とはどんなものか。

国家から捨てられ、なんの権利ももたない難民として世界最強の軍隊の無期限占領下に置かれたひとびとが、自分たちの／人間のよわさにむきあい、人間の生存と尊厳の回復をもとめて社会の団結をかため、他方で自然環境をふくむ外部の世界にひらかれ、外界から自由に活力をうけとりながら、よわいものを犠牲にしない社会思想と、やわらかな連帯の輪をひろげてきた。そのような沖縄デモクラシーのあゆみを、本書は無数の人びとの織りなす群像劇をとおしてえがいてゆきたい。

よわいものを犠牲にしない。いま述べたこの精神は、戦後沖縄の最大の思想的特質であり支柱となってきた。それは、都市部にある普天間飛行場の撤去のために沖縄内の過疎地に負担をおしつける「日米合意」をこばむ、現在の辺野古新基地反対運動のなかにも顕著にあらわれている。どうしてこの精神が歴史をつらぬく思想的な支柱となってきたのか。よわく小さいものを切り捨て強大な支配者にとりいること、それが〈捨て石・占領〉体制に対応する精神だとすれば、これを乗りこえようするあゆみこそが沖縄戦後史をなり立たせてきたからである。

そしていま辺野古の新基地建設をめぐる現場で、ひとびとは 1945 年以来の戦場化の終結、すなわち沖縄戦後史の真の終焉をかけて対峙している（三上千恵『戦場ぬ止み』大月書店、2015 年）。そこには歴史が現在形ですがたをあらわしている。

戦後沖縄の歴史にふれるとき、私たちは軍事力や国家権力によらない社会へのチャレンジが可能であること、またその具体的なありようを知ることができる。それは国家史の重圧、戦史の呪縛のただなかから、それらをつきぬけようとする人間社会の歴史－未来像をうかびあがらせる。

ながい時間をかけ、何重もの苦難をすこしずつはねかえしてきた沖縄のひとびとの、明るくたくましく、悲しみと怒りを深部にたたえた思想は、20 世紀の歴史が生んだ人類の宝にちがいないと思っている。この本でこれからめぐるのは、そのかたちのない宝を織りあげてきたひとびとの歴史の現場である。

本書は以下、次にように構成されている。

第１部　焦土からの旅立ち

第1章　戦後のはじまり　― 国家からの難民　1945 年

第2章　野生のデモクラシー　― 青年と政党　1946-51 年

第Ⅱ部　軍事独裁をたおす

第3章　「島ぐるみ」の土地闘争　― よわき無名の者たち　1952－56 年

第4章　「祖国復帰」自治獲得運動　― 先生と教え子たち 1957-72 年

第Ⅲ部　自然への復帰

第5章　海へ大地へ空へ　― ひとびとのネットワーク 1973-2014 年

終章　戦争のあとの未来へ ― 2015～

図１　辺野古新基地建設をとめる人びとの輪

（2016 年４月 18 日）